

ゲルク派の認識手段論 —— タルマリンチェンの解釈について ——

西沢 史仁

序

認識手段 (pramāṇa, tshad ma) を論ずる際に、認識手段とは何であるのかを明確に把握すること、即ち、認識手段の自體ないし定義 (lakṣaṇa, mtshan nyid) を確認することは、まず最初に為されるべき重要な課題である。『量評釈 (Pramāṇavārttika, PV)』において、認識手段論は、第二章の冒頭において見出される。第二章・量成就章 (pramāṇasiddhi) は、ディグナーガ (Dignāga, ca. 480–540) の『集量論 (Pramāṇasamuccaya)』の帰敬偈に対する註釈から派生したものである。ディグナーガは『集量論』帰敬偈において、世尊を、「認識手段となった (pramāṇabhūta, tshad mar gyur pa)」と表現しているが、それに対する註釈において、ダルマキールティ (Dharmakīrti, ca. 600–660) は、認識手段の一般的設定を議論している。ダルマキールティ自身は、PV II. 1–6 までの僅か六偈によって、簡略な形でしか説いておらず、その晦渋な表現の故に、その解釈を巡っては、インドにおいて、『量評釈』の註釈者達の間に種々の解釈の相異が生ずることになり、チベットにおいては、さらに多岐にわたる細かい解釈の相異が派生した。チベットにおける論理学 (tshad ma) の伝承を考える上で、最も重要なのは、(1) ゴク翻訳官 (rNgog lo tsā ba Blo ldan shes rab, 1059–1109) により創始されサンプ僧院を中心とする学僧により継承されたサンプ系の論理学と、(2) その流れを受けつつも、それに対して批判的な立場を取るサパン (Sa skya paṇḍita kun dga' rgyal mtshan, 1182–1251) 及びその随順者達の系譜 (= サキャ派の論理学)、及び、(3) これらサンプ系の論理学とサキャ派の論理学の二つの相承を受けた上で、新たに独自の発展を遂げたゲルク派の論理学の三つである。筆者は、現在、認識手段論を主題として、これら主だった三つの論理学の相承の関係を分析中であり、サパンの認識手段の定義に関しては、その成果の一部を公表した (西沢 2007)。そこでは、サパンの認識手段の定義に関する設定は、サパンの嘗ての論理学の師であるサンプ系の学僧ツルトウン・シヨヌセンゲ (mTshur ston gzhon nu seng ge, ca. 1150–1210) の『論理学智慧灯明 (Tshad ma shes rab sgron ma)』を前提としつつも、その解釈を批判することを通じて形成されたものであることが明らかになった。他方、ゲルク派では、このサパンの認識手段論の議論を前提としつつも、サパンとは異なる解釈を与えることになる。ゲルク派の基本的教義は、ゲルク派の創始者であるツォンカパ (Tsong kha pa blo bzang grags pa, 1357–1419)、及び、その直弟子であるタルマリンチェン (Dar ma rin chen, 1364–1432) とケドゥブジェ (mKhas grub dge legs dpal bzang, 1385–1438) の三者により確立され、その重要性から、この三者は、「聖三父子 (rje yab sras gsum)」と称される。論理学思想については、ツォンカパに論理学に関する纏まった著作がないこともあり¹、タルマリン

¹ ツォンカパ全集には、論理学の著作として、一小品と、三つの備忘録が収められている。それは以下の通り。

チェン、ケードゥブジェ、ゲンドゥンドゥブ (dGe 'dun grub, 1391–1474) らの論理学書を中心として、セラジェツウン・チューキゲルツェン (Se ra rje btsun chos kyi rgyal mtshan, 1469–1544)、パンチェン・ソナムタクパ (Paṇ chen bsod nams grags pa, 1478–1554)、クンケン・ジャムヤンシェーパ (Kun mkhyen 'jam dbyangs bzhad pa, 1648–1721) らにより著述された各学堂の論理学の教科書 (yig cha) が研究される。さらには、所謂「三大僧院 (bden sa gsum/ grwa sa gsum)」と称されるセラ・ガンデン・デブンの三つの大僧院以外にも、特にタシルンボ僧院やラトゥ学堂では、多数の論理学書が著された²。

本稿においては、このうちゲルク派の論理学思想を検討する上で最も重要なタルマリンチェンによる、認識手段の定義に関する解釈を主題とする。タルマリンチェンの論理学の主著である『量評釈解・解脱道解明 (Thar lam gsal byed)』は、ゲルク派における論理学の最も標準的にして権威のあるテキストと見做されている。論理学が集中的に問答されるジャン冬季法会 ('jang dgon chos) では、学堂の別にかかわらず、この『解脱道解明』を共通のテキストとして、ダルマキールティの『量評釈』が研究されるので、ゲルク派の論理学思想を研究するに際しては、まず最初に取り上げられるべきものである。ケードゥブジェやゲンドゥンドゥブは、『解脱道解明』を前提としつつも、独自の解釈を与えているが、紙面の関係上、その詳細は別稿に譲り、彼らの著作に対する言及は必要最小限に留める。

I. ゲルク派における認識手段の標準的な定義

タルマリンチェンの著作を検討する前に、まず最初に、後代ゲルク派の僧院において一般的に認められる認識手段の定義について、簡単に触れておこう。初期ゲルク派においては、諸論師に依じて、認識手段の定義の設定に解釈の相異が見られるが、後代に認識手段の標準的な定義として認められるものは、ドゥタ (bsdus grwa, [論理学] 要綱) やローリク (blo rig, 認識論) と呼ばれる論理学の初等教科書に見出される³。それは、通常、以

Toh 5400: *Tshad ma'i brjed byang chen mo* (タルマリンチェンによる備忘録)

Toh 5404: *mNgon sum le'u'i brjed byang* (タルマリンチェンによる備忘録)

Toh 5410: *mNgon sum le'u'i 'ikka* (ケードゥブジェによる備忘録)

Toh 5416: *sDe bdun la 'jug pa'i sgo don gnyer yid kyi mun sel* (ツォンカパの自著)

² 三大僧院及びタシルンボ僧院、ラトゥ学堂・タクボ学堂、ギュトウ・ギュメ学堂の教科書目録はロンドルラマにより作成されている。Klong rdol ngag dbang blo bzang gi gsung 'bum. Vol. 2. Bood ljongs bod yig dpe snying dpe skrun khang, 1991, pp. 590–601 を参照。西沢 2000 は、それを各学課毎に整理したリストと、インドに再建されたタシルンボ僧院四学堂及びセラジェ学堂の教科書目録、及び、『黄瑠璃史』所収のタシルンボ三顯教学堂及びセラジェ学堂の教科書目録を含む。他には、ツルティム 2004 pp. 299–307 参照。顯教の著作を中心とした聖三父子及びゲンドゥンドゥブの著作の科段 (sa bcad) 集成は、東洋文庫から出版されている。『西藏仏教基本文献』4 vols. 東洋文庫, 1996–1999 参照。

³ 例えば、mChog lha 'od zer, *Rwa stod bsdus grwa dang de'i dogs gcod*. Mundgod: Rato Datsang Tibetan Monastic University, 1992, p. 473.17; Thugs sras ngag dbang bkra shis, *Thugs sras ngag dbang bkra shis kyi mdzad pa'i bsdus grwa*. Mundgod: Drepung Gomang Library, 2000, p. 76.7; Kun mkhyen 'jam dbyangs bzhad pa, *Blo rig gi rnam gzhas nyung gsal legs bshad gser gyi phreng mdzes zhes bya ba bzhugs so*. Mundgod: Drepung Gomang Library, 1999, p. 30.2; Yongs 'dzin phur lcog pa blo bzang tshul khri ms, *Rigs lam 'phrul sde*. Kun su'u mi rigs dpe skrun khang, 1994, p. 262.1; *Rigs lam sgo brgya 'byed pa'i 'phrul gyi lde mig dang po bzhugs so*. Mundgod: Drepung Loseling Library Society, 1999, p. 51.3; Co ne rje btsun grags pa bshad sgrub, *Rab 'byams smra ba grags pa bshad sgrub nas*

下の形で表現される。

Def. *gsar du mi slu ba'i shes pa* (新たに[理解し,] 欺かない知⁴)

この定義は、PV II. 1a と PV II. 5c に示された認識手段の二つの規定、即ち、無欺性と新得性を合わせた定義である⁵。これが、ゲルク派において、最初に明確な形で、認識手段の定義として立てられたのは、タルマリンチェンによってである。それは、後述するように、彼の『解脱道解明』や『量決択タル註 (*rNam nges dar tik*)』等に見い出される。ツォンカパが、経量部ないし唯識派の説において、これを認識手段の定義として認めていたのかということは、資料的な制約の故に、慎重に検討されるべき課題であるが、少なくとも、ツォンカパ自身の唯一の論理学書である『七部論書入門 (*sDe bdun 'jug sgo*)』には、それは別の定義、即ち、「自身の対象を新たに理解する知 (*rang yul gсар du rtogs pa'i blo*)」(*sDe bdun 'jug sgo*, p. 1213.9) という新得性を主体とする定義が立てられている。ケードゥブジェは、逆に、無欺性を主体とした定義、「自立的に自身によって断定された認識対象に対して欺きがない知 (*rang dbang du rang gis yongs su bcad pa'i gzhal bya la bsu ba med pa'i shes pa*)」(*sDe 'dun rgyan*, p. 117.3; *Rigs pa'i rgya mtsho*, p. 465.9)⁶を立てており、タルマリンチェンと解釈が一致しない。ゲンドゥンドゥブは、『正理莊嚴』において、タルマリンチェン同様に、「新たに[理解し,] 欺かない知」(*Rigs rgyan*, p. 18.10) を認識手段の定義として立てているが、その内容に関してはタルマリンチェンとは微妙な解釈の相異がある。

blo gсар nams la thog mar 'dzin chos su gtang ba'i bsдus grwa blo gros mig 'byed zhes bya ba bzugs so. Bylakuppe: Seramey Library, 2001, p. 458.18; dKa' chen blo bzang bzod pa, *Blo rig gi nram gzhaг sger gyi me long zhes bya ba bzugs so*. Bylakuppe: Chhodhi Tashi Lhunpo Monastery Library, n.d., p. 58.7 等参照。

⁴ ここで *gsar du* という語の意味について一言言及しておく必要がある。これは、タルマリンチェン自身、PV II. 5c の語釈において、*dang po'am/ gsar du shes kyang* (i.e., *gsar du shes pa yang*) *de'i mtshan nyid kyi zur du smos dgos pa'i phyir* (最初に、ないし、新たに知るものもまた (*kyang, vā*), それ (= 認識手段) の定義の一部 (*zur*) に述べる必要があるから) と註釈しているように (*Thar lam gsal byed*, p. 347.8 参照), 直後の *mi slu ba* に掛かる副詞ではなく、*shes pa* に掛かり、知の新得性 (*gsar du shes pa*, i.e., *gsar du rtogs pa*) を示す。 *gsar du mi slu ba'i shes pa* を「新たに欺かない知」と訳すならば、その点が明瞭とならないので、「新たに[理解し] (*gsar du [rtogs zning]*)」と語を補足して訳しておく。これは、*gsar du mi slu ba'i shes pa* という定義が、PV II. 5c に示された *gsar du shes pa/ gsar du [rtogs pa'i] shes pa* (新たに知るもの／新たに[理解する] 知) と、PV II. 1a に示された *mi slu ba'i shes pa* (欺かない知) という二つの支分からなる定義であることを示す。

この *gsar du* という語が、*mi slu ba* に掛かる用例も、見られないわけではない。実際、タルマリンチェンは、先の一文の直後に、*pramāṇa* を、*dang por mi slu ba'am/ gsar du mi slu ba* と語釈している (*Thar lam gsal byed*, p. 347.10 参照)。しかし、その場合にも、この *gsar du* という語は、知の新得性 (= 新たに理解するもの) という限定を示すために付加されていることに留意すべきである。

⁵ PV II. 1a: *pramāṇam avisamvādi jñānam*; Tib. *tshad ma bsu med can shes pa*// (認識手段は、欺かない知である。) ; PV II. 5c: *ajñātārthaprakāśo vā*; Tib. *ma shes don gyi gsal byed kyang*// (未知の対象を明らかにするものもまた、[認識手段である。])。認識手段の定義を論ずる際に、インドにおいてもチベットにおいても、この二偈の内容及び関係を如何に解釈するのがポイントとなる。本稿では、簡略に、前偈に示された規定を、＜無欺性＞、後偈に示された規定を、＜新得性＞と表現する。

⁶ 『正理海』には、他に、*rang gis yongs su dpyad pa ltar gyi gzhal bya la rang dbang du bsu ba med pa can gyi shes pa* という形の定義も立てられているが、内容的には大差はない。 *Rigs pa'i rgya mtsho*, p. 425.21 参照。

II. タルマリンチェンの認識手段論

タルマリンチェンの認識手段論を論ずるにあたり、まず最初に、本稿において扱われる資料の範囲を限定しよう。タルマリンチェンは、聖三父子のうちでも、取り分け、論理学関係の著作が多い。本論考においては、そのうち、最も重要で、かつ、認識手段論が詳説される『解脱道解明』と『量決択タル註』を資料とする。この二つの著作の著述年代は、奥書や伝記資料から得られないが、『量決択タル註』には、『解脱道解明』に対する言及が見られるので、『量決択タル註』は、『解脱道解明』の後に著述されたことには疑いない⁷。それ故、最初に『解脱道解明』の認識手段論を検討してから、『量決択タル註』のそれに分析を移すことにする。

II.1. 『解脱道解明』における認識手段論

『解脱道解明』において、認識手段論は、第二章の冒頭部に見られる。科段としては、「認識手段の一般的定義 (tshad ma spyi'i mtshan nyid)」(*Thar lam gsal byed*, pp. 340.18–350.14) という科段の下に論じられる。これは、「定義の自体 (mtshan nyid kyi ngo bo)」と、「定義の限定 (mtshan nyid kyi khyad par)」という二つの科段に分けられ、前者は、PV II. 1a–5b の註釈であり、後者は、PV II. 5c–6 の註釈である。以下に当該部分の科段の全体を提示しておこう。なぜならば、この科段自体がタルマリンチェンの認識手段の定義に関する基本的な解釈を反映しているからである。

1. 認識手段の一般的定義 (tshad ma spyi'i mtshan nyid)

1 定義の自体 (mtshan nyid kyi ngo bo)

1. 定義 (mtshan nyid)

1. 無欺を確認すること (mi slu ba ngos gzung ba) [PV II. 1ac]
2. それに対して不遍充 [の過失] を断滅すること (de la ma khyab pa spang ba) [PV II. 1c–2]
3. それに対して過遍充 [の過失] を断滅すること (de la khyab ches pa spang ba) [PV II. 3ab]

2. 定義基体 (mtshan gzhi) [PV II. 3b–4c]

3. 定義基体において定義を確定するもの (mtshan gzhi la mtshan nyid nges byed) [PV II. 4d–5b]

2 定義の限定 (mtshan nyid kyi khyad par) [PV II. 5c–6]

2. 牟尼もまたその定義を有するものであると示すこと (thub pa'ang mtshan nyid de dang ldan par bstan pa) [PV II. 7a]

この科段から読み取れることは、先ず第一に、タルマリンチェンが認識手段の定義の自体として、PV II. 1a に示される無欺性を立て、その限定条件として、PV II. 5c に示される新得性を立てていることである。つまり、認識手段の自体 (ngo bo) としては、無欺性を立てるが、無欺性のみでは再理解 (bcad shes) に対して過遍充 (khyab ches pa, *ativyāpti) の過失があるので、それを断ずるために、PV II. 5c において新得性の規定が限定条件

⁷ *rNam nges dar ʼtik*, p. 27.17: ... *rNam 'grel gyi mam bshad du rgyas par bshad zin pa las shes par bya'o//*

(khyad par, *viśeṣaṇa) として付加され、この新得性により限定された無欺性を、認識手段の定義として立てるのである。以下その点を『解脱道解明』の記述に基づき検証しよう。

II.1.1. PV II. 1a と PV II. 5c に対する註釈

まずタルマリンチェンは、PV II. 1a に対する註釈において、認識手段を以下のように定義している。 *Thar lam gsal byed*, p. 341.3–9⁸:

[質問:] 生天に至福及び[それを獲得する] 手段という認識対象を理解することは、認識手段に依拠するが、そのような対象全てに対しても、牟尼だけが認識手段であるならば、その定義 (mtshan nyid) を有することにより [牟尼が] 認識手段となる (tshad mar 'gyur ba) とところの [その] 認識手段の一般的定義 (tshad ma spyi'i mtshan nyid) とは何であるのか、と云うならば、[回答:] 青を把握する直接知覚の認識手段が有法。認識手段である。新たに [理解し、] 欺きがない知 (gsar du **slu ba med pa can gyi shes pa**) であるから。

ここに明記されているように、タルマリンチェンは、「新たに [理解し、] 欺きがない知 (gsar du **bslu ba med pa can gyi shes pa**)」を認識手段の定義として立てている。この定義を示す部分は、PV II. 1a: tshad ma **bslu med can shes pa** の註釈になっているが、ここで注意すべきことは、タルマリンチェンは、この定義を註釈するにあたり、原文に直接的に示されていない「新たに (gsar du)」という限定を付加していることである。この限定は、後で、PV II. 5c において直接的に示されることになるが、タルマリンチェンは、既にその限定を、PV II. 1a を註釈する際に読み込んでいる。これは、彼が、PV II. 1a により、単に定義の一部分が示されたのではなく、＜新たに [理解し、] 欺かない知＞という認識手段の完全な定義が示されていると解釈していることを示唆する。即ち、PV II. 1a により直接的に示されたのは、無欺性のみであるが、間接的に、新得性も示されていると解釈するのである。この背景には、無欺性のみを認識手段の定義として立てるならば、再理解 (bcad shes) に対して過遍充の過失が生ずるという基本的な理解が潜在している。これは、PV II. 3ab⁹ に対する註釈に明言されているので、挙げておこう。 *Thar lam gsal byed*, p. 343.3–9¹⁰:

[対論者:] 再理解もまた認識手段であることになる。無欺があるから、と云うならば、

[論主:] 世俗 [知]、即ち、想起・再理解が有法。認識手段として認められない。自身を引起する以前の認識手段によって把握され、理解済みの、[その理解の] 作用が

⁸ mngon par mtho ba dang/ nges par legs pa thabs dang bcas pa'i gzhal bya rtogs pa ni tshad ma la rag las pa yin la/ de lta bu'i yul ma lus pa la yang thub pa nyag gcig tshad ma yin na/ mtshan nyid gang dang ldan pas tshad mar 'gyur ba'i tshad ma spyi'i mtshan nyid de gang zhe na/ sngo 'dzin mngon sum tshad ma chos can/ **tshad ma yin te/ gsar du bslu ba med pa can gyi shes pa** yin pa'i phyir/

⁹ PV II. 3ab: gr̥hītagrahanān neṣṭam sāmvr̥tam ... ; Tib. gzung ba 'dzin phyir kun rdzob ni// mi 'dod ... 「[既に] 把握されたものを [再度] 把握するので、世俗に属する [知] (sāmvr̥ta, i.e., vikalpajñāna, PVV) は [認識手段として] 認められない。

¹⁰ bcad shes kyang tshad mar thal te/ mi slu ba yod pa'i phyir zhe na/ blo **kun rdzob** pa dran pa bcad shes ni chos can/ tshad ma nyid du **mi 'dod** de/ rang 'dren byed kyi tshad ma snga mas gzung zhing rtogs zin byed pa na nyams pa'i don de nyid slar yang dran pas **'dzin** pa'i shes pa yin pa'i **phyir/**

退失していないその同じ対象を再び想起によって**把握する**知であるから。

他方、タルマリンチェンは、PV II. 5c に対して以下のように註釈している。 *Thar lam gsal byed*, p. 347.5–11¹¹:

無欺 (mi slu ba) のみにより認識手段の定義が完成するのではない。なぜならば、以前に知られていない対象の明示者、即ち、最初 [に] (dang po), ないし、新たに (gsar du) 知るものもまた (**kyang**)、それ (= 認識手段) の定義の一部 (zur) に述べる必要があるから。これ (= 当偈) により、認識手段の原語 (skad dod) の語釈と一致するように、<最初に欺かない (dang por mi slu ba) > ないし <新たに欺かない (gsar du mi slu ba) > という限定 (khyad par) が示されたのである。

タルマリンチェンは、無欺性のみにより認識手段の定義が充足するとは見なさない。これをタルマリンチェンは、認識手段の原語 *pramāṇa* の語釈に当てはめて解釈している。即ち、*pra-* という接頭辞は、*dang po* (最初に) ないし *gsar du* (新たに) を意味し、それ故、その限定が定義の主体である無欺性に付加される必要がある。

II.1.2. 認識手段の定義に関する他説の否定

『解脱道解明』では、この PV II. 5c の註釈において、認識手段の定義に関する他説及びそれに対する批判が見い出される。それはサバンの『正理宝蔵 (*Rigs gter*)』に見い出される四つの他説のうちの最初の二つ、即ち、デーヴェンドラブッディに帰される説と、莊嚴著者 (= プラジュニャーカラグプタ) に帰される説の二つである¹²。以下順に検討しよう。

II.1.2.1. デーヴェンドラブッディに帰される説

これは以下のように立てられている。 *Thar lam gsal byed*, p. 347.12–14¹³:

或る者が、「前 [偈] (i.e., PV II. 1a) と当 [偈] (i.e., PV II. 5c) は、認識手段の異名の定義 (tshad ma'i mtshan nyid rnam grangs pa) である」と云うことは、妥当ではない。

¹¹ mi slu ba tsam gyis tshad ma'i mtshan nyid rdzogs pa ma yin te/ sngar ma shes pa'i don gyi gsal byed de/ dang po'am/ gsar du shes **kyang** de'i mtshan nyid kyi zur du smos dgos pa'i phyir/ 'dis ni/ tshad ma'i skad dod kyi sgra bshad pa dang mthun par dang por mi slu ba'am/ gsar du mi slu ba zhes pa'i khyad par bstan pa yin no//

¹² サバンは、『正理宝蔵』において、認識手段の定義に関する四つの他説を立てた (*Rigs gter*, p. 210f.) が、それはタルマリンチェンも前提としている。デーヴェンドラブッディと莊嚴著者の説に対するケードゥブジェとゲンドゥンドゥブの言及については、*sDe 'dun rgyan*, pp. 108.4–109.14; *Rigs pa'i rgya mtsho*, pp. 468.1–469.20; *Rigs rgyan*, p. 16.10–18.5 参照。ケードゥブジェは、『七部論書莊嚴』では、さらに、大バラモンに帰される説と、ダルモツラに帰される説にも言及している。*sDe 'dun rgyan*, pp. 109.14–110.14 参照。『正理宝蔵』に立てられた四つの他説のうち、前三者はツルトゥン (及びツァンナクパ) の著作から引かれたことは既に指摘したが⁴ (西沢 2007 p. 332f.)、この三つは、チャパの著作にまで辿れることが判明した。チャパの『意聞拈拭』における認識手段論では、莊嚴著者、デーヴェンドラブッディ、ダルモツラの説が順に前主張として立てられ、批判されている。*Yid kyi mun sel* 32a2–33a4 参照。ツァンナクパの量決訳註には、この三説は前主張者の名称なしに立てられていたが (西沢 2007 pp. 337, 341, 345)、チャパは前主張者の名称を明示している点は注目に値する。他にも、この三者の説に対する批判は、*rNam nges cha 'ik* 20b4–21b7 にも見られる。

¹³ kha cig snga ma dang 'di gnyis/ tshad ma'i mtshan nyid rnam grangs pa yin no zhes zer ba mi 'thad de/ 'di gnyis la don spyimi 'dra ba so sor 'chad pa'i phyir/ mtshon bya'i ldog pa tha dad du 'gyur dgos so//

なぜならば、この二つには異なる対象普遍 (don spyi) が別々に顕現するから、定義対象の反体 (ldog pa) は別異となる必要がある。

この或る者の説は、『正理宝蔵』においてデーヴェンドラブッディに帰される説に相当する。即ち、サバンは認識手段の定義に関する他説を、無欺性と新得性の二つを同義異名と見做す説と、区別して説く説の二つに大別して、前者をデーヴェンドラブッディに、後者を莊嚴著者に帰しているが、そのうちの前者がここに立てられている¹⁴。タルマリンチェンは、この説を、無欺性と新得性を把握する知には、別々の対象普遍が顕現するので、両者は別異の意味反体 (don ldog), 即ち、定義であり、それ故、それぞれに応じて別々の定義対象の反体が立てられることになるといって批判しているが、これは、＜定義と定義対象の一对一対応＞に基づくサバンの批判を基本的に踏襲したものである¹⁵。しかし、この論法は、後にケドゥブジェとゲンドゥンドゥブにより批判されることになる。彼らの批判の主旨は、為他所証 (gzhan don bsgrub bya) に二つの定義が認められることを自説として承認することに基づくものである¹⁶。

II.1.2.2. 莊嚴著者に帰される説

タルマリンチェンはこのようにデーヴェンドラブッディに帰される説を批判してから、それとは別の説を挙げて批判している。 *Thar lam gsal byed*, pp. 347.15–348.2¹⁷:

あるいは、「前 [偈] によって言説の認識手段の定義が、そして、当 [偈] によって勝義の認識手段の定義が説示されたのである」と云うこともまた妥当ではない。なぜならば、そうであれば、勝義の認識手段は言説の認識手段となる。欺かない知であるから、言説の認識手段もまた勝義の認識手段となる。未知の対象の明示者であるから、

¹⁴ *Rigs gter*, p. 210.3ff. 参照。西沢 2007 p. 333ff. に『正理宝蔵』の当該箇所 の訳と分析が示されている。

¹⁵ デーヴェンドラブッディに帰される説に対するサバンの批判については、西沢 2007 pp. 357–360 参照。そこで、サバンは、その説を＜選択肢を有する ('dam kha can)＞定義、即ち、単一の定義対象に対して複数の選択可能な定義を立てる説として批判した。デーヴェンドラブッディの説をそのように解釈することは、ロンチェンに帰される論理学書『実性集成』では、Jo btsun の見解として見い出される。 *De kho na nyid bsdus pa*, p. 108.11–15 参照。そこで、Jo btsun はこのデーヴェンドラブッディの説を妥当なものとして見做しているが、それに対するチャバの批判が直後に挙げられている。 *ibid.* p. 108.15–109.20 参照。そこで、チャバは＜定義と定義対象の一对一対応説＞に基づいて Jo btsun の解釈を批判している。この批判は、 *Yid kyi mun sel* 32a9–32b5 に確認されるので、この＜定義と定義対象の一对一対応説＞は、チャバにまで遡ることが判明した。＜定義と定義対象の一对一対応説＞については、西沢 2007 p. 358f., n. 34 を参照せよ。他にも、 *rNam nges cha tik* 22b8: ... mtshon bya cig mtshon pa la mtshan nyid gnyis rnam par brtag pa myi rung pa'i phyr ro// (単一の定義対象を表示するのに、二つの定義を考察するのは妥当ではないから)。チャバによるデーヴェンドラブッディの説に対する批判は、 *rNam nges cha tik* 21b4–7 にも見られる。

¹⁶ *sDe bdun rgyan*, p. 108.17ff.; *Rigs rgyan*, p. 16.16ff. 参照。ケドゥブジェとゲンドゥンドゥブによれば、為他所証には、『集量論』に説かれた定義と、『正理門論』に説かれた定義の二つが認められるので、単一の定義対象に二つの定義が認められるという。

¹⁷ yang snga mas tha snyad pa'i tshad ma'i mtshan nyid dang/ 'dis don dam pa'i tshad ma'i mtshan nyid bstan to// zhes pa yang mi 'thad de/ 'o na/ don dam pa'i tshad ma de tha snyad pa'i tshad mar thal/ mi slu ba'i shes pa yin pa'i phyr/ tha snyad pa'i tshad ma yang don dam pa'i tshad mar thal/ ma shes don gyi gsal byed yin pa'i phyr/

これは、『正理宝蔵』において、莊嚴著者の説として立てられているものである¹⁸。それによれば、莊嚴著者（＝プラジュニャーカラグブタ）は、認識手段を言説の認識手段と勝義の認識手段の二つに分けて、それぞれ、順に、PV II. 1a と II. 5c により示されたという。ここでは前主張者の名称は立てられていないが、後続の文章（*Thar lam gsal byed*, p. 348.8）に、この説が莊嚴著者に帰される説であることをタルマリンチェン自身が明示している。但し、この説に対する批判の仕方は、『正理宝蔵』のそれとは相異なる。即ち、サパンは、二諦説の立場から認識手段を二つに分けて各々に個別的な定義を立てるプラジュニャーカラグブタの解釈の内容には立ち入らず、あくまで、彼の＜定義と定義対象の一对一対応説＞の立場から、プラジュニャーカラの説を批判した。サパンに依れば、プラジュニャーカラグブタの解釈は、（1）認識手段一般の定義を考察する箇所において、それを立てずに、認識手段を二つに分けて個別的な定義を立てるものであるもので、文脈と「無関係（*ma 'brel pa*）」であり、そして、（2）認識手段一般の単一の定義が立てられないならば、それに対応する認識手段という単一の定義対象もまたあり得ないことになるという二つの過失を提示する（*Rigs gter*, p. 212.3–7）¹⁹。

これに対して、タルマリンチェンは、ここに見られるように別の論法を使用してこの説を批判しているが²⁰、注意すべきは、ここに挙げられた説は、あくまで、サパンないしその随順者達により莊嚴著者に帰される説であり、タルマリンチェン自身は、それを莊嚴著者の説として認めていないことである。タルマリンチェンは、後続の文章において、莊嚴著者の説を以下のように解釈している。*Thar lam gsal byed*, p. 348.8–10²¹：

〔対論者：〕それならば、莊嚴著者によりそのように説かれたことは、何であるのか（＝如何なる意味であるのか）、と云うならば、

〔論主：〕それは、勝義の認識手段の定義基体（*mtshan gzhi*）に対して定義（*mtshan nyid*）という語によって示したのであり、〔認識手段の〕意味の反体（*don gyi ldog pa*, i.e., *mtshan nyid*）を別々に示そうとしたのではない。なぜならば、〔PV II. 1a により〕認識手段の一般的定義が示されただけで、〔その定義基体である勝義の認識手段は理解〕可能であるから。

タルマリンチェンによれば、莊嚴著者は、前後二つの偈により、言説と勝義の認識手段の二つの定義が別々に立てられたと解釈しているわけではない。莊嚴著者は認識手段の一般

¹⁸ *Rigs gter*, p. 210.5–14; 西沢 2007 pp. 337–342 参照。厳密には、『正理宝蔵』では、世俗の認識手段の定義としては、無欺性と新得性の集合体が立てられているので、ヤクトゥン等の『正理宝蔵』の随順者達の説と見做すべきかもしれない。西沢 2007 n. 19 参照。

¹⁹ この認識手段の一般的定義が得られないことになるという批判は、『実性集成』によれば、Byang chub skyabs によって説かれたものである。De kho na nyid bsdus pa, p. 108.7 参照。チャパによる莊嚴著者に帰される説に対する批判については、*Yid kyi mun sel* 32a3–9 と *rNam nges cha 'tik* 21b4 参照。

²⁰ この論法は、ケドゥップジェの『七部論書莊嚴』とゲンドゥンドゥブの『正理莊嚴』にも見られる。*sDe bdun rgyan*, p. 109.5ff.; *Rigs rgyan*, p. 17.11ff. 参照。

²¹ 'o na rGyan mkhan pos de ltar bshad pa ci zhe na/ de ni don dam pa'i [tshad ma'i] mtshan gzhi la mtshan nyid kyi; sgras bstan pa yin gyi/ don gyi ldog pa so sor bstan 'dod pa ma yin te/ tshad ma spyi'i mtshan nyid bstan pa tsam gyis nus pa'i phyir/

的定義を立てていないのではない。それは、PV II. 1a によって示されている²²。他方、PV II. 5c によって示されたのは、勝義の認識手段の定義ではなく、その定義基体であり、それに対して認識手段の定義という名称を仮設しただけである。それ故、「前後二つの偈により、勝義と世俗の二つの認識手段の定義が示された」と主張する説を莊嚴著者の説に帰するサパンらの解釈は妥当ではないといって批判する。

このように、タルマリンチェンには、先のデーヴェンドラブッディに帰される説に対する対応と、この莊嚴著者に帰される説に対する対応には違いが見られる。即ち、タルマリンチェンは、デーヴェンドラブッディに帰される説は、『正理宝蔵』に随順して批判したが、莊嚴著者に帰される説に関しては、それをサパンとは別様に解釈し、サパンの莊嚴著者の説に対する解釈及びそれに対する批判を受容せずに、逆にそれを批判した。ここには、タルマリンチェンが莊嚴著者の見解を自説として立てる明確な記述はないが、サパンらの莊嚴著者批判を再批判し、莊嚴著者の説を擁護していることから、タルマリンチェンが、莊嚴著者の説に対して肯定的な立場を取っていたことは間違いないであろう²³。

II.2. 『量決択タル註』における認識手段論

タルマリンチェンの『量決択タル註』では、第一章の冒頭部において、纏まった形での認識手段の一般的設定が見られる。『量決択タル註』は、『解脱道解明』より後の著作であり、タルマリンチェンのより最終的な解釈を理解する上で、重要な資料である。『量決択タル註』では、認識手段の一般的設定は、*rNam nges dar ʼtik*, pp. 19.5–55.1 に見られるが、それは、1. 真正な定義を理解する意味を有する定義基体の分類 (*mtshan nyid rnam par dag pa rtogs pa'i don can gyi mtshan gzhi'i dbye ba*)、2. 定義本論 (*mtshan nyid dngos*)、3. [認識手段の] 数に関する誤解を排除すること (*grangs la log par rtog pa bsal ba*)、という三つの科段に分けられる。認識手段の定義はこのうちの「定義本論」の科段 (*ibid.* pp. 23–28) で論じられる。この科段は、1. 句義 (*tshig don*) と、2. 精解 (*mtha' dpyad pa*) の二つに分けられる。内容の点からは、この定義本論の科段では、大きく分けるならば、1. 認識手段の定義に関する議論と、2. 認識手段性の議論、即ち、自確定と他確定の認識手段に関する議論の二つが見い出される。いまはそのうちの前者のみを抜粋して取り上げよう。

『量決択』において、認識手段の定義を示すとされる一文は、以下の一文である。

PVIn I. (Skt.) p. 1.10: na hy ābhyām arthaṃ paricchidya pravartamāno 'rthakriyāyām viśaṃvādyate//; (Tib.) p. 30.17: 'di dag gis don yongs su bcad nas 'jug pa na don bya ba

²² ここでタルマリンチェンは、『量評釈莊嚴』において、PV II. 1a により認識手段の一般的定義が示されたことを示す典拠を引いていないが、それは、PV II. 1a に対する『量評釈莊嚴』に明記されている。即ち、PVBh p. 3.20 ad II. 1a: *tatrasāmānyena pramāṇalakṣaṇaṃ nirdiśati/ pramāṇam aṣaṃvādi jñānaṃ*; Tib. D 2a5: *de la tshad ma'i mtshan nyid spyir bstan pa ni/ tshad ma slu ba med pa can gyi shes pa*。 「ここで、一般的に、認識手段の定義を示す。認識手段は、欺かない知である。」これは、ジャムヤンシェーパにより、莊嚴著者が認識手段の一般的定義を説示したことを示す教証として引かれている。 *Kun mkhyen mtha' dpyod*, p. 431.20ff. 参照。

²³ この傾向は、ケードゥプジェの『正理海』に一層顕著に見い出される。 *Rigs pa'i rgya mtsho*, p. 469.18–20 参照。これは彼の『七部論書莊嚴』には見られない傾向である。 *sDe bdun rgyan*, p. 109.5–14 参照。

la bslu ba med pa'i phyir ro//

[正しい知は、二種類ある。即ち、直接知覚と推論である。] なぜならば、これら（＝直接知覚と推論）によって、[人が] 対象を断定して[それに対して] 行動を起こすとき、目的を達成することに対して欺かないからである。

この一文に対して、タルマリンチェンは以下のように語釈している。rNam nges dar tik, p. 23.6–11²⁴:

[問い:] この二つ（＝直接知覚と推論）のみが認識手段であり、他のものは[認識手段]ではない根拠である[認識手段の] 一般的定義は何であるのか、と云うならば、
[回答:] これら、二つの認識手段によって、即ち、この二つのみによって、認識されるべき対象に対して、増益を新たに断じて (yongs su bcad nas), 認識対象に対して人が行動を起こすとき、煮焼き等の目的を達成することに対して欺かないからである。

ここでタルマリンチェンは、この一文が認識手段の一般的定義を示すことを明言している。この註釈において留意すべき点は、yongs su bcad nas の箇所に対する註釈である。この語は、paricchidya の訳語であるが、これを、タルマリンチェンは、「認識されるべき対象に対して、増益を新たに断じて」と註釈している。yongs su bcad pa と云う語を、対象を「断定すること（＝確定すること）」の意味ではなく、増益を「断つこと」の意味で解しているのである。その上、原文に見られない「新たに (gsar du)」という語句を付加している。反対項の＜増益を断ずること＞は、チャバ等のサンブ系の論理学では、「理解 (rtogs pa)」の意味であり、それが前提とされている²⁵。その点を念頭に置くならば、＜増益を新たに断ずること＞とは、＜新たに理解すること (gsar du rtogs pa)＞、即ち、新得性を意味するに他ならない。この『量決択』の一文には、PV II. 5c に見られるような新得性の条件を示す語はないが、タルマリンチェンは、yongs su bcad nas という語に対する註釈において、原文には見出せない新得性の条件を読み込んでいるのである。それ故、この『量決択』の一文は、認識手段の定義として無欺性のみを示したのではなく、新得性により限定された欺かない知、即ち、＜新たに[理解し、] 欺かない知 (gsar du mi slu ba'i shes pa)＞が認識手段の定義として示されたと解釈する。

これに引き続く文章において、タルマリンチェンは、ゴク翻訳官とダルモータラの見解に言及している。即ち、rNam nges dar tik, p. 23.11–15²⁶:

[ゴク] 大翻訳官は、『断じて（／断定して）(yongs su bcad nas)』という語句により過遍充が断ぜられるが、『行動を起こすとき』という語句により存立不可能が断ぜ

²⁴ 'di gnyis kho na tshad ma yin gyi/ gzhan ma yin pa'i rgyu mtshan spyi'i mtshan nyid gang yin zhe na/ tshad ma gnyis po 'di dag gis te 'di gnyis kho nas gzhal bya'i don la sgro 'dogs gsar du yongs su bcad nas gzhal bya'i don la skyes bu 'jug pa na btso sreg la sogs pa'i don bya ba byed pa la slu ba med pa'i phyir ro//

²⁵ チャバ、ツァンナクパ、ツルトゥンらが、理解を＜反対項の増益を断ずること＞と解釈することについては、西沢 2007 p. 352ff. 参照。

²⁶ lotstsha pa chen pos yongs su bcad nas zhes pa'i tshig gis khyab ches pa gcod la/ 'jug pa na zhes pas mi srid pa bcad nas ma khyab pa gcod pa shugs la go bar byed ces gsung ngo// mi slu ba med par mi 'gyur ba'i dgag pa gnyis kyis mi slu ba go bar byed par slob dpon chos mchog gis bshad do//

られ、不遍充を断ずることが間接的に理解される」²⁷とお説きになった。[他方、] 無欺がないことにならない (... med par mi 'gyur ba) という二重否定 (dgag pa gnyis) により、無欺が理解されると尊師ダルモータラにより説かれた²⁸。

サバンは、このゴク翻訳官の説をダルモータラの説と誤解しているが (西沢 2007 p. 343ff.), これはここに示されるように、ダルモータラの説ではなく、ゴク翻訳官の説であり、タルマリンチェンはそのことを正しく理解している。そして、認識手段の定義を以下のように論証式の形で提示している。 *rNam nges dar tik*, p. 23.15–19²⁹:

直接知覚と推論が有法。認識手段である。新たに [理解し、] 欺かない知であるから、ということと、あるいは、認識手段は直接知覚と推論の二つだけに数が確定される。[この] 二つだけにより、[人が対象に対して] 増益を新たに断じて行動を起こすとき、欺かないから。

ここには、認識手段の定義が明記されている。即ち、「新たに [理解し、] 欺かない知 (gsar du mi slu ba'i shes pa)」である。そして、その具体的な意味は、「[人が対象に対して] 増益を新たに断じて行動を起こすとき、欺かないもの (sgro 'dogs gsar du bcaad nas 'jug pa na mi slu bar byed pa)」である。

これに引き続く文章では、自確定と他確定の認識手段の議論が見られるが、科段の終わりの部分で再度認識手段の定義に関する議論が再説されている。即ち、*rNam nges dar tik*, p. 27.13–18³⁰:

『量評釈』に、認識手段の定義として、無欺と未知の対象の明示者の二つが説かれたのは、異なる意味反体が一つずつ示されたのではなく、「認識手段は欺かない知である」(PV II. 1a) には、「最初 (dang po)」と「新たな (gsar pa)」の意味は内在しているが (khong na gnas kyang), 明瞭でないので、後者 (i.e., PV II. 5c) により、定義のその限定 (khyad par) に対して疑いを断つのであり、[そのことは]『量評釈解説 (rNam 'grel gyi mnam bshad, i.e., *Thar lam gsal byed*)』に、詳細に解説し終わっているので、それから知られるべきである。

²⁷ *rNgog dka' 'grel*, p. 28.7–13 参照。当該箇所和訳は、西沢 2007 p. 346f. 参照。

²⁸ これは以下の『量決訳註』の一文に対する註釈となっている。PVinT p. 24.17: gang gi phyir 'di dag gis slu ba med de dgag pa gnyis kyis mi slu ba zhes bya ba'i don to// 「これら (= 直接知覚と推論) によって、欺きがない、即ち、二重否定により、「無欺 (*avisamvādaka)」の意味である。」Steinkellner/Krasser は、ここで、*na ... visamvādyate* の部分に二重否定が示されたと解している (Steinkellner/Krasser 1989 p. 75) が、これは妥当な解釈と思われる。ここでタルマリンチェンは、この「二重否定 (dgag pa gnyis)」という量決訳註の語を、mi slu ba med par mi 'gyur ba (無欺がないことにはならない) と否定辞を補足して註釈している。即ち、med pa と mi 'gyur ba の二重否定と捉えているわけであるが、この PVinT の一文の註釈としては妥当ではない。

²⁹ mngon sum dang rjes dpag chos can/ tshad ma yin te/ gsar du mi slu ba'i shes pa yin pa'i phyir/ zhes pa dang yang tshad ma mngon rjes gnyis kho nar grangs nges te/ gnyis po kho nar sgro 'dogs gsar du bcaad nas 'jug pa na mi slu bar byed pa de yin pa'i phyir/

³⁰ *rNam 'grel las tshad ma'i mtshan nyid mi slu ba dang/ ma shes don gsal gnyis bshad pa don ldog mi 'dra ba re ston pa ma yin gyi/ tshad ma bslu med can shes pa//* (PV II. 1a) zhes par dang po dang gsar pa'i don khong na gnas kyang gsal bor med pas phyi mas mtshan nyid kyi khyad par de la dogs pa gcod pa yin te/ *rNam 'grel gyi mnam bshad* du rgyas par bshad zin pa las shes par bya'o//

この文章は、『量評釈』の前後二つの偈により説かれた無欺性と新得性に関するタルマリ
ンチェンの基本的な解釈が明瞭に見い出される点で重要である。彼に依れば、PV II. 1a に
は無欺性が示されたばかりでなく、そこには新得性の意味も内在している。しかし、それ
は明瞭でないで、PV II. 5c によりそれが定義の限定として明示された。それ故、タルマ
リンチェンによれば、PV II. 1a によって、無欺性のみが説かれたのではなく、新得性もまた
含意されており、それにより、＜新たに〔理解し、〕欺かない知＞という認識手段の完全な
定義が示されたのである。そして、この解釈は、既に『解脱道解明』において詳説された
とあるので、その点で『解脱道解明』と『量決択タル註』には解釈の相異が無いことが分
かる。そして、この解釈は、後代、ゲルク派の学堂教科書の著者達により広く採用され、
ゲルク派の定説となった³¹。

纏め

以上から、明らかとなった認識手段の定義に関するタルマリンチェンの解釈を纏めてお
こう。それは、以下の通りである。

1. 新得性により限定された欺かない知、即ち、＜新たに〔理解し、〕欺かない知＞を
認識手段の定義として立てる。
2. PV II. 1a により認識手段の自体が、PV II. 5c により認識手段の限定が直接的に示
されたが、PV II. 1a により無欺性のみならず、新得性もまた間接的に示されてお
り、PV II. 1a により認識手段の完全な定義が示されたと解釈する。
3. ＜新たに (gsar du) ＞の限定が必要なのは、再理解 (bcad shes) を断除するため
である。

文献表

I. インド原典

『量評釈』(PV) Dharmakīrti, *Pramāṇavārttika*. Ed. Yūsho Miyasaka. インド古典研究 Acta
Indologica 2 (1971/72), pp. 1–206. (宮坂校訂本の第 1 章, 2 章, 3 章は、それぞれ
本書では、第 2 章, 3 章, 1 章に相応する。)

『量決択』(PVin I.) (Skt.) Dharmakīrti, *Pramāṇaviniścaya* Chapter I. (Sanskrit edition):
Ernst Steinkellner, *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya. Chapter 1 and 2*. Beijing–
Vienna, 2007.

『量決択』(PVin I.) (Tib.) Dharmakīrti, *Pramāṇaviniścaya* Chapter I. (Tibetan edition):
Tilman Vetter, *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścayaḥ, 1. Kapitel: Pratyakṣam. Ein-
leitung, Text der tibetischen Übersetzung, Sanskritfragmente, deutsche Übersetzung*.
Wien, 1966.

『量決択註』(PVinṬ) Dharmottara, *Pramāṇaviniścayaṭīkā*. Steinkellner/Krasser 1989 を見

³¹ 例えば, *Kun mkhyen mtha' dpyod*, p. 446.1ff. 参照。他には, Paṇ chen bsod nams grags pa, *rGyas
pa'i bstan bcos tshad ma nram 'grel gyi dka' 'grel dgongs pa rab gsal*. Krung go'i bod kyi shes rig dpe
skrun khang, 1998, p. 177.20ff. 参照。

よ。

『量評釈莊嚴』(PVBh) Prajñākaragupta, *Pramāṇavārttikabhāṣya*: Ono Motoi, *Prajñākaraguptas Erklärung der Definition gültiger Erkenntnis (Pramāṇavārttikālaṃkāra zu Pramāṇavārttika II. 1–7)*. Vol. 1. Wien, 2000.

II. 蔵外文献

『ゴク難語釈』(*rNgog dka' 'grel*) rNgog blo ldan shes rab, *Tshad ma rnam nges kyi dka' gnas rnam bshad*. 1st ed. Krung go'i bod kyi shes rig dpe skrun khang, 1994.

『量決択チャバ註』(*rNam nges cha 'tik*) Phywa (/Cha) pa chos kyi seng ge, *Tshad ma yid kyi mun sel*. In: *bKa' gdams gsung 'bum phyogs bsgrigs bzhugs so*. Vol. 8. dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang, 2006, pp. 434–626.

『意闡括拭』(*Yid kyi mun sel*) Phywa (/Cha) pa chos kyi seng ge, *Tshad ma yid kyi mun sel*. In: *bKa' gdams gsung 'bum phyogs bsgrigs bzhugs so*. Vol. 8. dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang, 2006, pp. 434–626.

『正理宝蔵』(*Rigs gter*) Sa skya paṇḍita Kun dga' rgyal mtshan, *Tshad ma rigs pa'i gter*. Ed. rDo rje rgyal po. 2nd ed. Mi rigs dpe skrun khang, 1989.

『実性集成』(*De kho na nyid bdus pa*) Klong chen rab 'byams, *Tshad ma de kho na nyid bsdus pa bzhugs*. Si khron mi rigs dpe skrun khang, 2000.

『七部論書入門』(*sDe bdun 'jug sgo*) rJe Tsong kha pa blo bzang grags pa, *sDe bdun la 'jug pa'i sgo don gnyer yid kyi mun sel*. In: *Legs bshad gser gyi phreng ba zhes bya ba bzhugs so*. mTsho sngon mi rigs dpe skrun khang, 1986, pp. 1207–1244.

『解脱道解明』(*Thar lam gsal byed*) rGyal tshab dar ma rin chen, *Tshad ma rnam 'grel gyi tshig le'ur byas pa'i rnam bshad thar phyin ci ma log par gsal bar byed pa/ [le'u dang po dang gnyis pa/]*. Ed. Phun tshogs don grub. Sarnath: Gelugpa Students' Welfare Committee, 2001.

『量決択タル註』(*rNam nges dar 'tik*) rGyal tshab dar ma rin chen, *bsTan bcos tshad ma rnam nges kyi 'tik chen dgongs pa rab gsal*. Kun su'u mi rigs dpe skrun khang, 1993.

『七部論書莊嚴』(*sDe 'dun rgyan*) mKhas grub dge legs dpal bzang, *Tshad ma sde 'dun gyi rgyan yid kyi mun sel*. 2nd. ed. Mi rigs dpe skrun khang, 1989.

『正理海』(*Rigs pa'i rgya mtsho*) mKhas grub dge legs dpal bzang, *rGyas pa'i bstan bcos tshad ma rnam 'grel gyi rgya cher bshad pa rigs pa'i rgya mtsho*. Sarnath: Gelugpa Students' Welfare Committee, 1998.

『正理莊嚴』(*Rigs rgyan*) dGe 'dun grub, *Tshad ma rigs rgyan*. 3rd. ed. Mundgod: Drepung Loseling Library Society, 1996.

『クンケン精解』(*Kun mkhyen mtha' dpyod*) Kun mkhyen 'Jam dbyangs bzhad pa'i rdo rje ngag dbang brtsun 'grus, *Tshad ma rnam 'grel gyi mtha' dpyod thar lam rab gsal tshad ma'i 'od brgya 'bar ba las le'u dang po'i mtha' dpyod blo gsal mgul rgyan skal bzang 'jug ngogs bzhugs so*. (Kun mkhyen 'jam dbyangs bzhad pa'i gsung 'bum Vol. pa) Mundgod: Drepung Gomang Library, 2002.

III. 参考文献

- Dreyfus, Georges 1991 Dharmakīrti's Definition of Pramāṇa and its its Interpreters. In: *Studies in the Buddhist Epistemological Tradition: Preceedings of the Second International Dharmakīrti Conference, Vienna, June 11–16, 1989*. Ed. Ernst Steinkellner. Wien, 1991. pp. 19–38.
- Franco, Eli 1991 The Disjunction in Pramāṇavārttika, Pramāṇasiddhi Chapter Verse 5c. In: *Studies in the Buddhist Epistemological Tradition: Preceedings of the Second International Dharmakīrti Conference, Vienna, June 11–16, 1989*. Ed. Ernst Steinkellner. Wien, 1991, pp. 39–52.
- Katsura, Shoryu 1984 Dharmakīrti's Theory of Truth. *Journal of Indian Philosophy* 12 (1984), pp. 215–235.
- Krasser, Helmut 2001 On Dharmakīrti's Understanding of pramāṇabhūta and His Definition of pramāṇa. *WZKS* 45 (2001), pp. 173–199.
- Steinkeller, Ernst/ Krasser, Helmut 1989 *Dharmottaras Exkurs zur Definition gültiger Erkenntnis im Pramāṇaviniścaya (Materialien zur Definition gültiger Erkenntnis in der Tradition Dharmakīrtis I)*. Wien, 1989.
- Van Bijlert, Vittorio A. 1989 *Epistemology and Spiritual Authority. The Development of Epistemology and Logic in the Old Nyāya and the Buddhist School of Epistemology with an Annotated Translation of Dharmakīrti's Pramāṇavārttika II. (Pramāṇasiddhi) VV. 1–7*. Wien, 1989.
- 木村誠司 1995 「プラマーナの定義」『駒沢短期大学仏教論集』1 (1995), pp. 49–60.
—— 1999 「定義とプラマーナの定義」『駒沢短期大学仏教論集』3 (1997), pp. 1–17.
- ツルティム・ケサン 2004 『rGya gar gyi tshad ma rig pa'i lta grub 'phel rim dang tshad ma rig pa'i lo rgyus (インド論理学・認識論の発展と論理学・認識論の歴史)』西藏仏教文化協会, 2004. [蔵文]
- 2006 「タルマリンチェン著『量評釈の釈論・解脱道作明 Thar lam gsal byed』第2章「量の成立」試訳(1)」『真宗総合研究所研究紀要』23 (2006), pp. 113–175.
- 西沢史仁 2000 「チベット僧院教科書目録」(Catalogue of Tibetan Monastic Textbooks). In: *The Toyo Bunko Multilingual Database CD for Asian Studies (Release 2)*. 東洋文庫, 2000 (未刊, 平成十二年度文部省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)の助成に基づく).
- 2007 「サキャパンディタの認識手段論 —— 認識手段の定義をめぐる ——」『東洋文化研究所紀要』152 (2007), pp. (325)–(379).

2009.3.25 稿

にしざわ ふみひと 日本学術振興会特別研究員

The Theory of *Pramāṇa* by dGe lugs pa
— On the Interpretation of rGyal tshab Dar ma rin chen —

Fumihito NISHIZAWA

rGyal tshab Dar ma rin chen (1364–1432) is the one of the main disciples of rJe Tsong kha pa (1357–1419), the founder of the dGe lugs pa. The fundamental doctrine of the dGe lugs pa was established mainly by so-called *rJe yab sras gsum*, i.e., rJe Tsong kha pa, rGyal tshab Dar ma rin chen, and mKhas grub dGe legs dpal bzang (1385–1438). Among them, Dar ma rin chen is famous for his writings on *pramāṇa/tshad ma*, especially for his commentary on *Pramāṇavārttika*, named *rNam bshad thar lam gsal byed*, which has been regarded as one of the most standard and authoritative texts in the dGe lugs pa's *pramāṇa* tradition. In this small essay, I will focus on his interpretation on the definition of *pramāṇa* which is found in *Thar lam gsal byed* and *rNam nges dar ṭik*, his detailed commentary on *Pramāṇavinīścaya*.

We can find his explanation of the definition of *pramāṇa* in *Thar lam gsal byed* pp. 340.18–350.14, the commentary on PV II. 1–6, and in *rNam nges dar ṭik* pp. 19.5–55.1, the commentary on the passage of PVin I. (Skt.) p. 1.10: *na hy ābhyāṃ arthaṃ paricchidya pravartamāno 'rthakriyāyāṃ viśaṃvādyate*. The point is how to interpret these two definitions, i.e., *avisamvādatva* shown in PV II. 1a and *ajñātārthaprakāśakatva* shown in PV II. 5c. On these two definitions, as indicated by Sa paṇ in his *Tshad ma rigs gter*, Indian commentators, Devendrabuddhi, Prajñākara Gupta and Dharmottara, made different interpretations, and Tibetan scholars developed this argument in more detailed and enlarged ways. Dar ma rin chen obviously kept this argument in mind when he explained the definition of *pramāṇa*. My analysis of these two texts composed by Dar ma rin chen leads to the following conclusions:

1. Dar ma rin chen regards “*gsar du mi slu ba'i shes pa* (a newly [understanding and] non-belying knowledge)” as the definition of *pramāṇa*. This definition is the combination of the two definitions, *avisamvādatva* and *ajñātārthaprakāśakatva*. However, it is noteworthy that he explained *avisamvādatva* as “*ngo bo* (**svarūpa*, nature)” of *pramāṇa*, and *ajñātārthaprakāśakatva* as “*khyad par* (**viśeṣaṇa*, restriction)”. That means that he stressed on *avisamvādatva* as the main nature of *pramāṇa*, not *ajñātārthaprakāśakatva*. Therefore we can conclude that Dar ma rin chen regarded the non-belying knowledge restricted by novelty as the definition of *pramāṇa*. This interpretation has been widely accepted as the standard definition of *pramāṇa* in the dGe lugs pa monasteries.
2. According to Dar ma rin chen, PV II. 1a shows the complete definition of *pramāṇa*, not a part of it, although it shows *avisamvādatva* alone in a direct way. That means, he recognized that PV II. 1a also includes *ajñātārthaprakāśakatva*, another part of the definition, in an indirect way.

3. The necessity of the restriction of *ajñātārthaparakāśakatva* is to exclude *bcad shes* (re-understanding knowledge).